

教科書に見る農業・農村の位置づけの変化 — 小学校社会科を対象に、30年前と現在 —

How Agriculture and Countryside have been Described in Primary School Textbooks
— 30 Years Ago and The Present in Social Subjects —

北口 まゆ子 広田 純一
(岩手大学農学部)

I はじめに

本研究の目的は、社会が農業や農村をどのようにとらえてきたかを、小学校の社会科教科書を素材に明らかにすることである。農業や農村に対する社会の見方は、農業や農村にかかわる政策決定にも直接・間接に結びついている。かつて農村が貧しかった時代には、農業や農村の振興は社会的・地域的な格差是正のためにも善とされたが、所得や生活環境面で都市との格差が縮まるにつれて、現在では農業や農村への投資に対する懐疑的な意見や批判が多く出されるようになった。またその一方では、世界における長期的な食糧不足への不安が自国農業の保護への関心を高めるとともに、農業や農村が有する文化的価値や教育的効果にも関心が寄せられるようになった。

農業や農村に対する社会の視線を知るには、その時代のメディアや論説、書籍などが一つの材料を与えてくれるし、アンケート等による世論調査結果も重要な資料となる。しかし、これらは時代のムードに過度に反応しすぎる欠点がある。その点で義務教育で用いられる小学校教科書は、突発的な事件や短期的な視点にとらわれずに、農業や農村を比較的長期的な視点から中立的に記述するという特徴がある。むしろ、教科書といえども完全に中立的ではありえず、時代の風潮を反映することは当然である。しか

し、時代の風潮を反映するからこそ、分析の対象とする意味もあるわけで、社会の見方を知るための重要な素材であることは間違いない。

本研究では、小学校社会科教科書において農業・農村がどのように取り上げられているかを、高度経済成長期にあった30年前と現在の教科書を対比させつつ検討を加える。農業や農村の価値を広く国民にアピールする必要性が喧伝されている現在、社会のとらえ方を知ることには、効果的なアピールの方法を検討するうえでも必要と考える。

II 分析方法

日本の小学校教科書には国語・社会・算数・理科・書写・生活・音楽・図工・家庭・保健・地図の11種類があり、農業・農村を最も多く取り上げているのは社会である。そこで、この社会の教科書において農業・農村が話題として取り上げられている箇所を、話題別に抽出・整理し、そのページ数をカウントした。話題の分類は、教科書の目次通りではなく、内容に沿ってふさわしい項目名を新たに付けて分類した。また、話題別のページ数のカウントに当たっては、1ページの中に複数の話題が含まれていることがあるため、1ページを十等分してカウントした。この際、文章だけでなく、図、表、写真、グラフ、絵もその話題に相当する部分として同時にカウントした。次に、農業・農村の取

り上げられ方を別の角度から分析するために、農業・農村に関連する主な用語の種類とその使用頻度をカウントした。カウントの対象は農業・農村を話題としている箇所だけでなく、教科書全体とした。なお、農産物の単語は、「米」と「野菜」が他に比べてはるかに多く出てくると、「麦」や「大豆」などは貿易や流通などの話題にも出てくるため、今回は「米」と「野菜」のみをカウントした。

分析対象とした教科書は、現在、筆者の大学（岩手大学）の附属小学校で使用されており、一般にも広く普及している、東京書籍出版の「新編 新しい社会」を用いた。30年前の教科書も、同じ出版社の同名の教科書を使用した。なお、今回の分析は東京書籍出版の教科書のみを対象としているが、他の出版社（教育出版、大阪書籍、日本文教出版、光村図書出版）の教科書でも内容に特に大きな差は見られなかった。

また、現在において1・2年生に社会科はなく、代わりに理科と社会を合わせた「生活」があるが、理科と社会の区別が困難であったため対象外とした。一方、30年前では1年生に社会科がなかったため教科書がない。以上より、現在（1998年）は3～6年生、30年前（1968年）は2～6年生の教科書を分析の対象とした。

Ⅲ 比較結果

1. 全体的な特徴

現在の教科書の総ページ数は652ページ、30年前のそれは1020ページで、30年前の教科書は現在より56%も多く、情報量は明らかに多い（表1）。外見的には、現在の教科書は写真を多用し、カラーでサイズも大きく、また生徒に馴染みのあるキャラクター（ドラえもん）を登場させて絵本のような雰囲気もある。これに対して、30年前は文字が多く、写真はほとんど白黒でかたい感じがする（表2）。記述の仕方は、現在は一つの事実に対するいろいろな見方を生徒による会話方式で記述し、生徒に考えさせる場を与えているのに対し、30年前は説明調の事

実の紹介が中心である。

表1. 教科書のページ数

学年	1968年	1998年	比率('98/'68)
2	80		
3	176	140	0.8
4	236	160	0.7
5	256	176	0.7
6	272	176	0.6
全体	1020	652	0.6

注) 1968年の1年と1998年の1,2年は教科書なし。

表2. 写真・グラフ・絵・図・表の数

	1968年	1998年
写真	97	159
グラフ	61	50
絵	94	32
図	25	20
表	8	6
計	285	267
総ページ数	1,020	652
1ページあたり枚数	0.3	0.4

2. 農業・農村のシェア

教科書全体に占める農業・農村の割合は、現在が19%、30年前が18%で大きな変化はない。一方、工業・都市が全体に占める割合は現在が15%であるのに対し、30年前は21%と現在より4割も多く取り上げており、高度経済成長期にあった30年前との状況の変化を端的に示している（図1）。工業・都市の話題の減少分は、現在は環境問題やゴミ問題などの新たな話題に割かれている。

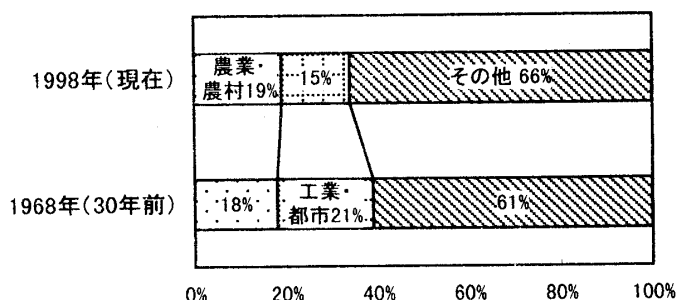
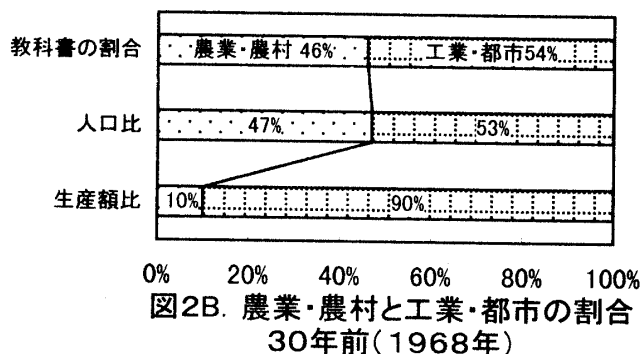
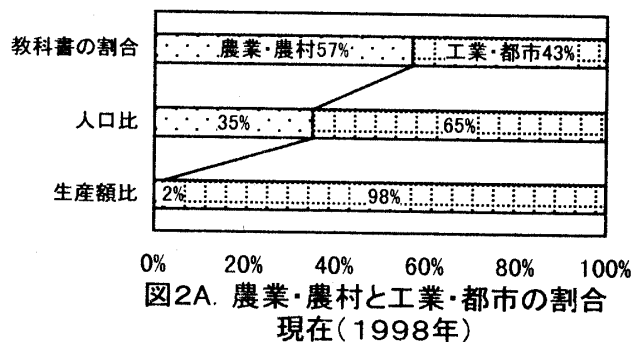


図1. 農業・農村が全体に占める割合

農業・農村と工業・都市の割合は、現在約3:2と、農業・農村の方が1.5倍も多く取り上げられている。農村/都市の人口比や、農業/工業の生産額比と比べると、農業・農村を取り上げている割合は相当大きいといえる（図2A）。つまり、現在の教科書においては、農業

・農村は比較的重視されているということである。

これに対して、30年前の教科書では、農業・農村と工業・都市の割合は約1:1.15で、工業・都市が農業・農村より2割弱多く取り上げられている(図2B)。農村/都市の人口比と比較すると妥当といえるが、農業/工業の生産額比からするとやはり農業・農村を取り上げている割合は大きいといえる。ともあれ、30年前と比較しても、現在の教科書がいかに農業・農村を重視しているかがよくわかる。



- 注1)人口比は国勢調査におけるDID人口(都市)と非DID人口(農村)を採った。
現在(1998年)は1995年、30年前(1968年)は1965年の国勢調査データを用いた。
- 注2)生産額比は、現在は、1995年の経済企画庁経済研究所国民経済計算部「国民経済計算年報」を、30年前は、経済企画庁経済研究所国民所得部「国民所得統計年報」を用いた。

3. 話題別の比較

(1) 全体的傾向

話題を大きく「農業」、「農村」、「農家」に三区区分すると、それぞれの構成比は図3の通りで、現在、30年前ともに「農業」の割合が大きい。

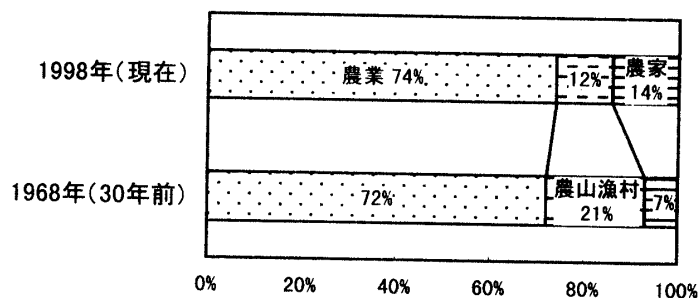


図3. 農業・農村・農家の構成比

(2) 農業の話題

図4に「農業」の話題別内訳を示す。現在では、多いものから順に、「土地柄と農業」、「農産物の産地・生産高・流通」、「農作業」、「農業施設」、「農地・耕地」、「農業と環境保全」、「農業の近代化・技術改良」、「日本の歴史と稲作」、「農業・農家が抱える問題」、「農業協同組合」、「外国の農業」であり、農業生産に関わる話題が上位を占めるが、環境保全との関わりなども取り上げられている。また、稲作に関することは他よりも多く取り上げられ、「農業」のうち約4割を占めている。

次に、30年前では、多い順に、「農業の近代化・技術改良」、「土地柄と農業」、「農産物の産地・生産高・流通」、「農作業」、「外国の農業」、「農業の歴史」、「日本の歴史と稲作」、「農業施設」、「農業・農家が抱える問題」、「農業協同組合」、「農地・耕地」となっており、現在は第7位で5%しかない「農業の近代化・技術改良」が27%と断然トップを占めているが目立つ。その具体的内容は、八郎潟などの干拓、耕地・用水路整備、農作物の品種改良、農薬・化学肥料の改良、農業の機械化などで、ヘリコプターなどによる農薬散布を農作業の新しい方法として良い意味で取り上げていることは興味深い。現在では、農薬や化学肥料に代わって堆肥を使った土づくりなどを取り上げ、30年前にはなかった「農業と環境保全」が登場するようになっているのと好対照を見せている。

現在はなく30年前にあった話題に「農業の歴史」があるが、これは日本の稲作の発展についてである。また、「外国の農業」は、現在は1%しかないのに対し、30年前は8%もあるが、これは現在はアメリカと中国しか取り上げていな

いのに対し、30年前は20カ国も取り上げているためである。他に、「農業協同組合」において、シェアに変化はないがその内容が多少変化しており、30年前の中では農家と農協が密接に関わっていることを何度も取り上げている。

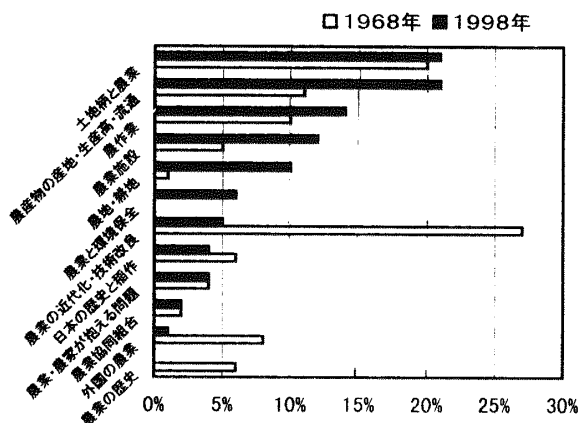


図4. 農業の話題別内訳

(3) 農村の話題

図5に「農村」の話題別内訳を示す。現在では、多い順に、「農村の過疎化」、「農村活性化」、「山村の暮らしと様子」、「レクリエーション・イベント」である。まだ量的には多いとは言えないが、「地域づくり」や、都市農村交流、あるいは農村での観光・農業体験・イベントなど、現在のトピックスも、もれなく取り上げられている。

30年前の「農村」の話題は、多い順に、「山村の暮らしと様子」、「漁村の暮らしと様子」、「共同作業」、「農村の生活改善」、「農村の暮らしと様子」、「開発の進む山村」となっており、現在と比べて話題に劇的な変化があることがわかる。30年前にあり現在はない話題のうち、まず「共同作業」の内容は、村普請や農繁期の共同保育、共同炊事である。「農村の生活改善」は、農家の台所など住まいの改善であり、「鉄筋コンクリート3階建ての農家」の写真や、簡易水道整備についての絵や記述などが取り上げられている。また、30年前は農村、山村、漁村をそれぞれ独立の目次として取り上げ、その暮らしと様子を現在よりも詳しく取り上げている。たとえば、山村や漁村の暮らしには、現在はない「段々畑での農作業」が紹介されている。

全般的に、農村の貧しさとその改善の必要性が強調された記述となっている。

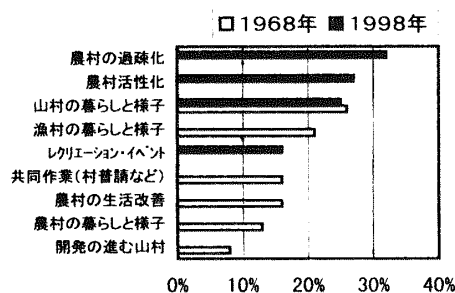


図5. 農村の話題別内訳

(4) 農家の話題

現在の「農家」の話題は、昔と現在の農家の様子・暮らしが主である。この中で、農業者の呼び名については、歴史的な話題の中では「農民」、現在の話題の中では「農家の人」という使い分けも行われている。この「農家・農民の様子と暮らし」の取り上げ方は、30年前もほぼ同じである。次に、30年前にあり現在はない話題としては「農家の仕事」があり、「出稼ぎ」、「わら細工」など農家の冬場の仕事を紹介している。

4. 学年別の特徴

現在、30年前ともに農業・農村を特に多く取り上げているのは4年と5年である(図6)。

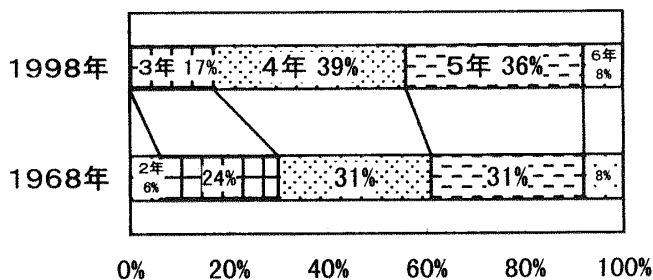


図6. 学年別内訳

6年は主に歴史であり、米づくりから「むら・くに」ができたことを述べ、歴史の導入部には「田の神祭り」の写真が大きく(見開き2ページ)掲載されている。農業は時代ごとに取り上げているが、その内容はほとんど稲作に関することである。また、「農村」、「農民」は貧しかったと述べられている。

30年前の取り上げ方は、現在のように、あ

る特定の話題のみに絞るのではなく、様々な事例を紹介しているのが特徴である。「用水」を例にとると、現在は「通潤橋用水」一つのみを詳しく丁寧に取り上げているが、30年前は「愛知用水」、「箱根用水」など複数の例を取り上げている。

5. 用語の比較

現在の教科書では、農業・農村に関する用語が71種類ある。これに対し、30年前は85種類であり、現在より2割も多い。これらの用語を、「農業」、「農村」、「農家」に三区別すると表3の通りであり、現在、30年前とも「農業」の用語が圧倒的に多い。

表3. 農業・農村・農家の用語の種類数とその内訳

	1968年	出現頻度	1998年	出現頻度
農業	67	78%	52	73%
農村	9	11%	9	13%
農家	9	11%	10	14%
計	85	100%	71	100%

現在のみ用いられている用語は27種類、68回あり、出現頻度の多い順に、「町づくり」、「堆肥」、「ビニールハウス」、「稲作」、「土づくり」、「食料生産」、「ハウス」、「特別町民」、「豊かな農業」、「耕地の整備」となっている（表4）。また、一度しか取り上げられていないが、「自然の堆肥」、「よい土」、「バイオ技術」、「バイオファーム」、「地域づくり」、「人づくり」が登場しており、環境保全や農村活性化、有機農業などへの関心が高まっていることが見てとれる。なお、「かまど」が二回取り上げられているが、これは「昔の農家の暮らし」の中に出てくるものである。

次に、30年前のみに取り上げられている用語は39種類、173回で、多い順に「部落」、「干拓」、「段々畑」、「はや作り」、「耕耘機」、「埋立」、「用水」、「二期作」、「裏作」、「有線放送」、「農地改革」である（表5）。この中でトップを占める「部落」は、農村や山村、漁村の話題の中で頻繁に取り上げられている。また「農業」の話題で、「農業の近代化・技術改良」がトップを占めていたことからわかるように、これに関連する様々な用語が取り上げられている。

表4. 1998年だけに出てくる用語とその出現頻度

用語	頻度
町づくり	12
堆肥	7
ビニールハウス、稲作	6
土づくり、食料生産	4
ハウス	3
特別町民、豊かな農業	2
耕地の整備、ほり田	2
田植機、かまど	2
近郊野菜、水路、転作	1
自然の堆肥、よい土	1
バイオ技術、バイオファーム	1
地域づくり、人づくり	1
国際交流、収穫祭、鎌	1
稲作農家、専業農家	1
計	68
用語の種類	27

表5. 1968年だけに出てくる用語とその出現頻度

用語	頻度
部落	47
干拓	14
段々畑	13
はや作り	10
耕耘機	9
埋立	7
二期作	6
裏作、農地改革、有線放送	5
干拓地、箱根用水	4
客土、ビニル、脱穀機	4
灌漑、共同炊事	3
工芸作物、農業の改善	2
開拓団、貯水池、おそ作り、カマス	2
農村の生活改善、出稼ぎ	2
開拓、土地の改良、八郎湯	1
暗渠排水、愛知用水	1
肥料工場、水揚げ機、役肉牛	1
農林事務所、茶の組合	1
俵、寄宿舎、簡易水道、たきもの	1
計	173
用語の種類	39

現在、30年前に共通する用語としては、多いものから順に、「農業」、「田」、「農家」、「米」、「畑」、「野菜」、「農民」、「米づくり」、「用水」、「耕地」で出現頻度も非常に多い（表6）。「農村」が30年前も現在もあまり多く使われていない点は興味深い。

表6. 現在、30年前のどちらにも出てくる用語とその出現頻度

用語	頻度		
	1968年	1998年	計
農業	152	43	195
田	94	57	151
農家	93	49	142
米	69	57	126
畑	81	41	122
野菜	61	40	101
農民	24	43	67
米づくり	39	25	64
用水	34	19	53
耕地	27	14	41
用水路	22	17	39
水田	24	10	34
農業協同組合	20	12	32
農産物	15	11	26
農村	17	8	25
田畑	16	5	21
肥料	13	2	15
農業	9	5	14
機械化	11	2	13
農作業	4	8	12
兼業農家	9	2	11
農地	6	5	11
化学肥料	4	6	10
開墾	7	2	9
焼畑	2	6	8
ため池、品種の改良	6	2	8
稲刈り、三毛作	5	3	8
排水	5	2	7
農業試験場	5	1	6
トラクター	4	2	6
耕地整理、土間	4	1	5
井戸	1	4	5
コンバイン、炭焼き	3	1	4
排水路、農業用水	1	2	3
いろいろ	2	1	3
農業機械、薪、村づくり	1	1	2
計	911	520	1431
用語の種類	43		

IV まとめ

We analyzed how agriculture and countryside have been described in social subjects textbooks of primary school by comparing the present textbooks with 30 years ago. The results are as follows;

- 1) The share of pages on agriculture and countryside has not much changed at 18% to 19%. While the share of industry and cities was 21% in the past and 15% at present. It shows that agriculture and countryside now became to be thought more important.
- 2) The contents have considerably changed. In 30 years ago modernization of agriculture and improvement of farmers' life were most important topics, while in the present textbooks, the contents on agriculture and countryside cover a wide range including environment issues, revitalization and recreation etc.

以上の結果をまとめると次の通りである。

- (1) 総ページ数は現在は 652 ページ、30 年前は 1020 ページで、30 年前の方が情報量が多い。
- (2) 農業・農村のシェアは、現在が 19%、30 年前が 18%と、意外に重視されている。
- (3) 話題としては、30 年前も現在も、「農村」や「農家」よりも「農業」に関することが多い。
- (4) 「農村」の話題に劇的な変化がある。
- (5) 全体として、様々な話題を取り上げてはいるものの、現在、30 年前ともに話題の中心は生産に関することであり、しかも稲作についての記述が非常に多い。

また、全体を通じて、小学校教科書にはその時代の農業・農村の位置づけが明確に示されていることがわかった。高度経済成長の過程にあった 30 年前には、農業の生産性向上や農村の生活改善に多くのページが割かれていたのに対し、経済成長を達成した現在では、農業生産の現状の客観的な記述が増えるとともに、環境問題や農村活性化、農村でのレクリエーションといった新たな話題が採用されている。全般的に農業・農村を取り上げる視点は以前より多様になってきているが、依然として記述の中心は農業生産にあるのが特徴である。現在、農業や農村は食料生産以外の機能に注目が集まっているが、それらはまだ教科書の中には反映されていない。このことは、そうした評価がまだ社会的には十分確立されていないことを示しているとも考えられる。

本研究に用いた教科書は、岩手大学附属小学校、岩手県立総合教育研究センターからお借りした。ここに記して謝意を表する。